

書 評

Kiyonori KANASAKA “Unbeaten Tracks in Japan REVISITING ISABELLA BIRD : New Abridged Edition with Notes and Commentaries”

Folkestone: Renaissance Books, 2020, xxxiii+xxiv+336+32p, £55.00

本書『イザベラ・バード再訪 日本の未踏の地—注記と解説付き新簡略本』は、金坂清則氏が学術的な価値について解説を加えた上で、英語圏の読者を想定した注記を付して1885年版 *Unbeaten Tracks in Japan* を忠実に復刻し、バードの復刻本の決定版たるべく上梓されたものである。

出版元である Renaissance Books はイングランドの出版社で、東および中央アジア研究、特に日本に関係する著作を数多く出版していることで知られている。

本書の構成は以下の通りである。

Author’s Preface to the English Edition (英語版に向けた著者序文)

The Kanasaka Commentaries: (金坂による解説 (コメンタリー))

- 1: Background to the Publication of the Abridged Edition, 1885 (1885年の簡略本出版の背景)
- 2: Structure of the Abridged Edition and Organization of this Annotated Edition (簡略本の構造と注釈付きの本復刻の構成)
Treatment of Bird’s footnotes in this edition (原著脚注の本書での取り扱い)

UNBEATEN TRACKS IN JAPAN: AN ACCOUNT OF TRAVELS IN THE INTERIOR INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND THE SHRINE OF NIKKŌ (日本の未踏の地—蝦夷の先住民と日光東照宮訪問を含む内地旅行の報告)

INDEX. (索引)

MR. MURRAY’S GENERAL LIST OF WORKS.

(マレー社の出版総目録)

冒頭の「英語版に向けた著者序文」は、「イザ

ベラ・バードと『日本の未踏の地』[本書を刊行する3つの理由][2巻からなる完全本と簡略本との違い、およびパトナム版のタイトルを使用する理由][本書のさらなる意義]の4節から構成される。

バードの生没年、旅行家としての位置づけ・評価について述べた上で、1971年以来、著者の確認できる限りでは40以上の出版社から *UNBEATEN TRACKS IN JAPAN* の復刻が行われていることを指摘する。それらの復刻は、1880年に出版された2冊からなる総頁819頁の完全本を1885年に縮約する形で出版された1冊からなる簡略本が元版となっていることに注意を払っておらず、それを意識することが重要であるという認識も持っていない可能性が高いと著者は批判を加える。

そして、バードの日本での旅行がイギリスの駐日公使であったパークスの助力や日本政府の支援の上で行われたものという事実を認識せず、イギリス人女性が自力のみで北海道のアイヌの世界へと飛び込んでいくというロマンティックな旅としてのみとらえ復刻を行っている現状を問題視する。

その上で、これまでに行われてきた復刻とは異なり、2冊からなる完全本と1冊からなる簡略本との違い、2冊本から簡略本が編集され出版された経緯を説明し、簡略本の中でもパトナム版のタイトルを採用する理由について説得的に述べている。

両本を含めたバードの著作各版の比較検討を行った著者の手によることにより、バードの著作の輝きを示すことができると述べる本書の説明は、完全本の日本語訳書である『完訳 日本奥地紀行』全4巻¹⁾ 及び簡略本の日本語訳書である『新訳 日本奥地紀行』²⁾、バードの挿絵・写真と現代の写真を対比させ、さらに日本語と英語の対訳を付した『ツイン・タイム・トラベル—イザベラ・バードの旅の世界』³⁾、バードについての知識を広く知らしめるために著された『イザベラ・バードと日本の旅』⁴⁾ 及び *Isabella Bird and Japan : A Reassessment*⁵⁾ など示されてきた主張を、英語圏の読者を想定して、復刻を見据えて再構成したものととらえることができよう。

続く「金坂による解説(コメンタリー)」は本書の直接的な元本となった日本語版である『新訳日本奥地紀行』の巻末に付された解説をもととしているが、「英語版に向けた著者序文」とも一部重なる内容を含みながら、後続のバード原著を理解する上での基礎的な情報を要領良く解説している。

ただし、「金坂による解説(コメンタリー)」の末尾に付された部分は復刻を行う上での体裁に関する断り書きであり、バード原著では1のような形で付されていた脚注を復刻では①のように置き換えたこと、これは金坂氏による注記として○付きでない数字を使用するためであることが簡潔に述べられている。バード原著の脚注の数と金坂氏による注記の数は圧倒的に後者が多いため、やむを得ないことであるが、後述するとおり本書の復刻がオリジナルのフォーマットをできる限り尊重していることに鑑みると、著者にとって決して本意ではなかったかと推察する。

ここまでで33頁となり、残りは復刻部分となる。具体的には24頁がバード原著の目次、336頁が本文、32頁が1885年版のバード原著に掲載されていたマレー社の出版総目録となる。

本書の中核となる復刻部分である、*UNBEATEN TRACKS IN JAPAN: AN ACCOUNT OF TRAVELS IN THE INTERIOR INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND THE SHRINE OF NIKKŌ*についてみていきたい。

本書の復刻では1885年版*Unbeaten Tracks in Japan*を忠実に紙面に再現することを重視しており、原著そのままのサイズ感で組版している。具体的には、本書の復刻部分の原文は横幅9cmとなっているが、これは1893年版までの簡略本の横幅に準拠したものである。

LETTERと表記される各報について、著者は簡略本と完全本の両方の数字を併記した上で、パトナム版が数字を省略した代わりに付した内容を要約する小見出しを尊重しており、読者の深い理解を助けるように工夫がなされている。

特に表紙に掲載されている写真は1885年版の*Unbeaten Tracks in Japan*の表紙である。これは1880年の完全本の表紙が97%に縮小されつつも、継続使用されたものであったが、その後には出版された普及本や廉価本では使用されなかった。著者

は所有する7つの版本から最も良い状態のものを選んで、本書の表紙として使用している。

バード原著に掲載されていた40枚の銅版画についても、著者が状態の良いものを精選して掲載しており、資料的な価値が高い。

そして本書の中で最も価値があるのは、復刻の下部に付された著者による注記部分であろう。簡略本では、完全本にあった日本の事情についての説明が存在していない上、多くの読者にとって日本、しかも現在から140年以上も前のことについての知識を十分に持つことは容易ではない。本書の注記は『新訳 日本奥地紀行』の注記をベースとしながらも、異なる文化的背景、基礎知識を有する英語版読者の読解を助け、理解を深めるために必要なものを選び付しているほか、いくつかの新規の注記も加えている。先述したように金坂によって付された注記の数は膨大であるが、これによって英語圏の読者もバード原著を理解し、その価値を正しく評価できようになっているのである。

さらに原著そのままの組版と同一頁内に収まるように、版面幅を広げるとともに原著よりも小さなポイントの活字を使用することで、必要な情報を落とすことなく注記はコンパクトな形に整えられている。読者層への考慮を行った上で組版を維持することは相当な苦心が必要であり、ここにも著者の信念が貫かれていることが知られる。

復刻末尾の*MR. MURRAY'S GENERAL LIST OF WORKS*では、1885年段階におけるマレー社が出版していた書籍が一覧の形で示されている。これは日本語の訳書では省略されるものだが、バードの完全本および簡略本が求められた社会的背景を窺い知る上で興味深い情報を提供してくれる。

バード原著の著作権保護期間は既に満了しており、現在、インターネットを検索すると原文の全文テキストデータや原著全頁の画像データを無料で閲覧することができる。このような歴史資料のデジタルアーカイブ化とインターネットでの公開は、近年、急速に広がっている。このような状況を鑑みるならば、簡略本の中で学術的にみて復刻する価値のある底本として1885年の簡略本を選択し、原著のサイズ感を尊重した上でコンパクトにまとめられた注記を追求した本書は、今後の資料復刻・翻刻の方向性を考える上でも非常に示唆

的で、重要な成果であると評価できる。

さて、本書の復刻部分についての言及はここまでとして、読者の理解を深めるために著者が行った工夫について確認していきたい。

まず、バードの自画像についてであるが、高梨健吉氏の訳出による『日本奥地紀行』⁶⁾のバードの写真が日本旅行時のものではなく、より後の時代のものであることを金坂氏は批判しているが、本書に掲載されるバードの自画像は、1880年7月のものである。これは、バードが日本を旅した1878年に近い写真ということで選ばれている。

ハードカバーの見返しにはMap of Isabella Bird's Journeys through Japanと題された縮尺500万分の1の非常に精緻なルートマップが収められている。バードの原著では完全本から簡略本に改められた際に訪問地の位置関係が分かる程度の日本地図さえも省略されてしまったことを踏まえるならば、これは読者にとって有意味で適切なものである。見返しのルートマップはバードの日本での旅の全行程について図化しており、簡略本の収録範囲の行程を実線、省略された関西への行程を破線で示している。ハードカバーの見返しの表裏両方ともに同一図が掲載されているが、どちらかを簡略本の旅程範囲にフォーカスした拡大図とすることによって、バードの詳細な経路、東北日本の地名、さらにはその位置関係について、より一層の理解を図ることができるのではなかろうか。

なお非常に些末なことだが、ルートマップの方記号が片矢羽根で表現されているのが気になった。日本付近では磁北は真北よりも西偏しているが、片矢羽根の磁北の方向がルートマップの経線と平行する形で揃っているように見える。そこまで神経質になる必要はないのかもしれないが、隅々まで丹念に吟味した上で構成がなされている本書ゆえに気になった次第である。

ところで書誌情報を記した頁のISBNをみると、今回、取り上げるために読み進めたハードカバー版のほかに、本書にはe-Book版が設定されていることが分かる。出版元であるRenaissance Booksのウェブサイトを確認しても本書についてはハードカバー版の記載のみしかみえない。ゆえに今後の展開を見通して入れられたと思われるが、ここには地理学者の手による本書のさらなる展開の可能性の一つがあると評者は考える。

ハードカバー版では縮尺500万分の1となっているルートマップであるが、e-Book版ではGoogle Mapsなどの電子地図上で自由に拡大縮小表示可能な形で提供することを視野に入れていくと、興味深い展開が期待できるのではなかろうか。本書は読者として日本の地理に不案内な外国人を想定していると考えられるが、現在、日常的に使用される電子地図と親和性の高い形でのバードに関する地理学的知見および地理情報の提供は、日本人読者にとっても待望されるであろう。

特に、金坂氏が提唱してきている「過去の旅行記に描かれた旅を私たちの旅に取り込み、2つの旅の時空を主体的に重ね合わせる旅」＝「ツイン・タイム・トラベル」を普及させ、旅を通しての異文化交流・国際交流にも役立たせるためには、重要なツールとなる可能性を秘めていると考える。

上述の点は本書の次に位置づく課題であろうが、歴史資料のデジタルアーカイブ化とインターネットでの公開が進む現在の状況下での、旅行記復刻・翻刻に関わる歴史地理学が進むことのできる方向性の1つを示しているにとらえるべきであろう。

なお本書は55ポンド、本稿作成時の日本円で換算すると7,500円程度とバードの簡略本の復刻としてみた場合、決して安価ではない。しかし、これまでみてきたような本書の内容と水準に鑑みるならば良心的な価格設定であることがわかるだろう。

このような本書がイギリスの出版社から刊行されたのは、金坂氏が完訳から新訳へと翻訳の歩みを進め、バードについての著作を日本語だけでなく英語でも精力的に発表してきたことで可能になったものであった。それゆえさらなる発展として、2冊からなる完全本についての同種の著作の刊行を期待して擱筆したい。

(堀 健彦)

〔注〕

- 1) 金坂清則訳『完訳 日本奥地紀行1～4』平凡社、2012～2013。
- 2) 金坂清則訳『新訳 日本奥地紀行』平凡社、2013。

- 3) 金坂清則 『ツイン・タイム・トラベル：イザベラ・バードの旅の世界』 平凡社, 2014。
- 4) 金坂清則 『イザベラ・バードと日本の旅』 平凡社新書, 2014。
- 5) Kiyonori KANASAKA, *Isabella Bird and Japan: A Reassessment* Folkestone: Renaissance Books, 2017。
- 6) 高梨健吉訳 『日本奥地紀行』 平凡社, 1973。